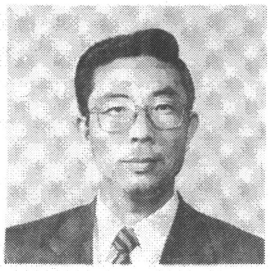
名古屋
石田学園報
第10号　平成10(1998). 4. 1

名古屋明徳短期大学
星城高等学校
星城中学校
星の城幼稚園
名英予備校
名英図書出版協会

脚下照顧

理事長・学園長 石田正城



「平成」新年号も早や10年を迎えようとしています。しかし、泰平な時代に進むより、むしろ後退をしています。

戦後のベビーブーム「団塊の世代」が社会の中心を占め、その子弟が学生・生徒の年代になっています。先般来の中学生によるセンセーショナルな事件に代表されるような凶悪な少年犯罪の増加等の数字が示すように殺人、強盗、暴走行為、薬物使用など予期もしない、考えられない事件が相次いでいます。ある教育誌に今日の若者のうれうべき状況について次のような記事がありました。『若者の変化や犯罪の背景に「金を中心にした大人の価値観が心の価値観を駆逐しつつある」という点に最大限の注意を払う必要があるということです。「テレクラ・自動販売機・悪質な書籍・低俗番組・改造車両・薬物・24時間営業・低俗商品・風俗営業・環境破壊・悪質犯罪」等々、青少年の教育上好ましくない影響が懸念される環境を、大人達が日常的に身近にしかも数多く存在させているという現実に、もっと目を向けるべきではないでしょうか。そして、心の教育が本当に必要なのは、子供達では無く大人達ではないでしょうか。「道徳」が「社会の一員として守るべき基準」だとすれば、大人が作りだしている社会の「守るべき基準」を大人自身が律するべきだと考えます。日本はもっともっと道徳教育に関する社会的な責任を追求すべきです。』

まったく同感で、今の大人の社会は子供に対してお手本を示せなくなってしまいました。このことは、百年前には黄金の国といわれたバングラディシュの貧困な現状がイギリス、オランダによる植民地政策での「学校教育・リーダー育成」の否定に原因があったように、日本もGHQの占領政策の意図的な排除によって「われわれの祖先が永年築きあげてきた正しい歴史・道徳・宗教教育」が否定され、「民主化」の名を借りて日本の民族性と精神性、伝統等の貴重な文化遺産がことごとく去勢されてきました。これによって精神的なよりどころを失くした今日の日本の姿は、政治・行政・マスコミの腐敗、堕落、無軌道さ、教育の崩壊や不健康な社会現象等となって表れてきています。

さて、本学園のこの10年間を振り返って見ますと、将来の生徒、学生数の減少を予期して、一貫教育を通してその経営の安定的基盤の確立を目指し、平成元年に名古屋明徳短期大学の設置、平成5年星城中学校の開設をしてきました。そして、その主旨を実現するために職員の皆様方には、一層の研鑽をお願いしてまいりました。しかし、バブルの崩壊、景気の低迷等から私立学校での生徒減少の波は強く、生徒減・学力レベルの低下と本学園の実情も誠に厳しいものがあります。

そこで上記の情勢の中で本学園及び教育の専門家としてのあるべき姿を考えるとき、我々はどのような行動を取るべきでしょうか。第一に先般の星城高校創立記念講演での上甲晃先生の言葉「妥協と迎合では人は育たない」の中にあると思います。浮わついた世の流れに屈せず、日本人として東洋思想「礼節第一」を旨として基礎・基本で妥協を許さず生徒・学生を指導していく強い実践力が必要だと思います。「子を養いて教えざるは父の過なり、訓導の厳ならざるは師の惰なり」(宋の司馬温公勧学歌の一節)

第二に今は不況の中で業績不振の会社がどんどん倒産しています。しかし儲かっている会社も結構あります。成長する会社、倒産する会社、現在は正に玉石混交の時代です。強い会社の特色は経営に明確な「志」を持っています。逆に弱い会社は場あたり的・受身・マンネリ・保身といった逃げの姿が顕著です。幸い本学園には明解な「志」建学の精神である「報謝の至誠・文化の創造・世界観の確立」があります。全職員が脚下照顧、志を高く全力で邁進していただくことをお願いします。

魅力ある教育実践を！

副学園長　織　田　　晃

今年度は、本学園にとっては名古屋明徳短期大学の開学10周年にあたる記念すべき年であります。

また、教育課程審議会の本答申が夏には提出される予定であり、高等学校以下の具体的な教育改革に向けての議論が本格化することが予測されます。新教育課程の実施は2003年度に予定されていますが、それまでの５年間に移行措置を含めた新しい方向にどのように対処していくかについて、様々な変動要因を読み込んだ上でのシミュレーションを学園挙げて実施する年を迎えたと言えます。

以下、平成９年度の各種会議等を通して感じたことの一端を述べさせていただきます。

◆各部門の課題

・星の城幼稚園は、明るい教師集団と効果的な研修を通して素晴らしい幼児教育が実施されています。園児一人一人の動きまで予測した日案を見せていただくたびに感心させられます。今後とも地域の信頼と評価をより高めていくためには、「地域の子育てセンター」としての役割を一層強めていく教育実践と新しい試みが求められます。

・５周年を終えた星城中学は、仰星コースとの連携による中高一貫教育の完成年度を迎え、いよいよその成果を問うことになります。開校以来、草創期特有の幾多の困難を献身的な努力と使命感で克服してみえた先生方のご尽力には頭が下がります。在学する生徒のほとんどが塾経験者であることを鑑みると、中学生の早い時期にどれだけ「自己学習能力」を身につけさせることが出来るかが全体のレベルアップをはかる鍵だと考えられます。

・県下一の大規模校に発展した星城高校が、すばらしい勢いを誇っていることは実に心強い限りです。このことは、周囲の状況変化への適切な素早い対応と、全教職員の協力による建学の精神に基づいた文武両道にわたる特色ある日常の教育実践とが、内外から極めて高い評価を受けていることの何よりの証と言えます。今後は、ある意味では守成の難事に立ち向かうことになりますが、より高い目標を掲げ、生徒一人一人の個性を十分に伸ばす「個を生かす教育」のより一層の推進が期待されます。

・10周年を迎える明徳短大は、開学以来国際化・情報化がすすむ社会に適応できる人材の育成に努めてきましたが、同一学科を擁する四大との競合関係は一段と厳しさを増してきています。設置されている両学科は今日の社会的要請に十分に応えうる学科であり、更に2005年開港予定の中部新国際空港最寄りの短大という立地条件を視野に入れたとき、将来展望も自ずから開けて来ることが期待されますが、そのためには全学を挙げて短大としての「存在感」を高めるためのより一層魅力ある特色豊かな教育の実践と学生に対する徹底した学業指導の充実とが喫緊の課題と言えます。

・伝統を誇る名英予備校は、従来からの小人数による授業展開という長所を生かしつつ入学生の多様化に対応するための教材開発を含めたフォロー体制の改善充実とその周知を図ることが望まれます。

・同じく事業部は、これまでも周囲の状況変化に適切に対応し、新しい市場の開拓や教材の開発に努めてきた姿勢は、新教育課程の公表とともに動きだす教育改善を間近に控えまことに頼もしい限りであり、今後もアンテナをより高く張り続けて頂きたい。

◆危機管理体制と存在感の充実

平成10年は極めて厳しい経済状況の中で新年を迎えましたが、それを反映した記事が地元の経済紙にも連載されました。中経の「生き残りをかけて＝今年の中部産業界＝」もその一つですが、その中で名鉄百貨店の「ニューボーン計画」が紹介されていました。2000年春にオープン予定の高島屋を意識し、「あなたは今のサービスで高島屋に勝てますか」というスローガンが全ての事務所に掲示され、売り場、人事・給与制度から社員の意識まであらゆる面での改革を求めているとのことです。消費が落ち込んだ昨年も売上げを伸ばしたのは、この危機管理体制が有効に機能した結果ではないでしょうか。

「危機管理」ということは、平常時から将来予測される事態や変化に対して適切かつ予防的に機能させてこそ本来の意味があります。

また、昨年の暮、「アイシン精機志望者殺到」という記事がありました。前年の３倍に達した志望者が異口同音に語った動機は「火事でトヨタをストップさせるほどの会社」ということでした。大勢の志願者を引き付けたのは、世界に冠たるトヨタの生産ラインを何日間もストップさせるという重要な地位と技術を誇る企業という、まさにこの企業自身が持つ優れた業績とイメージでしょう。そのことに他を圧倒する「存在感」を感じさせられます。

学校教育で言えば「特色ある魅力に富んだ教育実践が日常的にどのように行われ、そのことが在校生や卒業生にどのように具現化されているか」が問われるということでしょう。

★＜名古屋明徳短期大学＞

◎『ユニークなカリキュラム紹介』

平成３年の大学設置基準の大綱化に伴い各大学、短大ともカリキュラム編成には工夫をこらしてきている。

名古屋明徳短期大学でも短大運営上、様々な工夫・改革を行ってきた。なかでも平成９年度からは単位制をそれまでの通年制から半期制へ改めるとともに、全面的にカリキュラムの見直しを図った。この目的は学生にとって良いカリキュラムとは何かを基本的な考え方として改革したものである。このなかでもユニークな科目として「自由研究」を新設した。特に国際文化科の「自由研究Ｆ」は１単位科目であるが、この運用は２年間の中でいろいろなテーマを組み合わせてそれぞれにポイントを与え、15ポイントを修得すれば１単位が与えられるという仕組みになっている。

どんなテーマがあるか紹介すると、文化の吸収を考慮した美術鑑賞・名画鑑賞、遺跡の発掘調査、社会とのつながり、ボランティア、講演会の聴講、企業の現場研修など幅広いものとなっている。

学生たちも従来型の教室内での講義・演習のみならず一歩踏み出した体験・実習などに興味を示している様子がうかがわれ、当初予想したよりも実績が上がっているように思われ、すでに1単位を取得し次の単位取得に意欲を見いだしている学生も現れた。

英語科の「自由研究Ｂ」では英検、TOEFL等資格指向に対する支援としての内容となっている。これも今後さらに効果の上がる方法を研究し成果につなげたい。

両学科とも半期制への移行にともなって生まれた空き時間を有効に活用して、在学中に色々な経験を積み、様々な教育を身に付けさせて、充実感・達成感を得させると言う趣旨のカリキュラムとしてまずまずの成果が見られている。

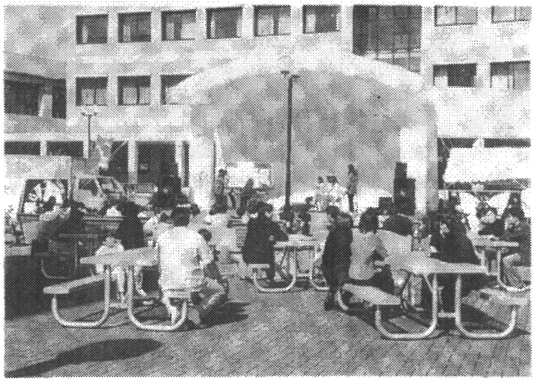
◎『活力ある大学祭を目指して』

好天に恵まれ10月11日(土)･12日(日)の２日間、秋桜祭(大学祭)が開催されました。

学生会の企画・運営によるこの行事も８回を数え、年々学生・地域へ定着してきたようです。今年は、短大後援会総会や公開講座・オープンキャンパス(高校生対象)も同日に開かれ、多くの方々に学内を観ていただけました。

催し物は、クラス・ゼミやクラブによる研究発表・模擬店・フリーマーケット等があり、近年は学習成果の発表として、「現地演習」(研修旅行)の展示・企画が増えてきました。また、学生会企画の中庭ステージでのゲーム大会・体育館でのコンサートは来校者を楽しませ、後夜祭で初めて試みたキャンプファイヤーや花火打上げも成功のうちに終わりました。

今後は、学校行事としての位置づけを学内外に明確にしながら、学生と教職員が一体となって盛り上がり、秋桜祭が「名古屋明徳短期大学」のエネルギーになることを期待したいものです。



◎『後援会よりの多彩な支援活動』

本学の後援会活動も３年を経過し、様々な支援活動が行われてきた。

そのなかでも、本学学生の海外留学に対する支援活動として留学奨学金の支給制度があるが、このたび支給開始となった。

最近では、学生の海外留学に対する希望は強いものがあり、本学でもスカラシップ入試での入学者に対する対応、入学後学内募集で合格した留学希望者への対応と制度をつくり運用している。

今回短期研修留学生３名(期間２カ月以内)、中期留学生(期間６カ月以内)１名が本年度対象者として後援会より費用の一部を支給された。

学生の海外留学体験は教育効果も大きいものと思われ、大いに支援したいところでありこの支給により成果が得られるものと確信している。

一方、教員に対する学術研究支援についても毎年予算計上されている。大学の研究・教育水準向上のためには教員の不断の研究活動が大切であり、このことに対して後援会の深い理解をいただいている表れである。今年度予算の中では２名の教員の研究分野での出版活動に対し、出版費用の一部が支給された。今後もそれぞれの研究分野への支援活動が続けられるものであり研究、教育の励みとなることが期待される。

★＜星城高等学校＞

◎『韓国への修学旅行』

星城高校学監　片　桐　　亨

韓国への修学旅行は今回で10回目である。毎年見学地に大差はないが、回を重ねる度に味に深みが増してくるから不思議である。ねらいは当初と変わっていない。1. 姉妹校東山学園との友好関係を一層深めること。2. 祖先の故郷を尋ね日本への文化のルーツに想いを走せること。3. 私たちの先輩が過去に犯した不幸な歴史に痛みを忘れぬことである。

今年は、男子10月6日(月)～9日(木)、女子10月8日(水)～11日(土)の日程で、ソウル－群 山－慶州の旅程を快晴に恵まれて終えることができた。その間、私たちは、外国にいる違和感を殆んど感ずることはなかった。民族と文化の共通性が、幾多の歴史的変遷を経ながらも脈々と引き継がれている事実に、驚きを感ずると同時に私たちの今後の生き方に大きな示唆が与えられた思いであった。勿論この事を生徒は論理的に整理された形で血とし肉としたわけではない。

彼等の作文の中に頻繁にみられる「素晴しかった」「もっと見学の時間が欲しい」等々の充実した感動や、生徒に投げかけられた現地の人達のかっての日本人への憾みにとまどう表現の中にそれらをみることができる。彼等が得たものは極めて大きい。

私たちが今回の旅行を通して学ぶことができたものは単に過去の問題についてだけではなく、優れて今日的な課題のものもあった。ショッピングでのことである。土産物を購入するに際して、私は日本式の考えで商品に包装をお願いしたが、韓国では無駄と使い捨ては決してしないと断わられた。私はそれを機に特に道路の状態を具に観察したが、日本では日常茶飯事のタバコの吸いがらの放棄、空缶・紙カップ類の散乱は遂に見ることができなかった。驚きと恥しさの中から地球を大切にするということは、このような日常生活の積み重ねにあることを教えられた。ゴミの散乱と、マスコミを通して報道される老人に対する子供夫婦による虐待など今日の暗い日本の世相を考えるとき、本校の建学の精神が一層の重みをもって響くのが実感できた修学旅行であった。

◎『星城が変わる』

平成10年度入学生から星城高校の特色であるコース制が変更されることになりました。

ここで、大きな変更点とその特色を紹介します。まず今年まで女子部に設けられておりました「特進英語コース」は、発展的解消を遂げることになりました。すなわち、近年女子生徒の中で四年制大学への進学希望者が増えると同時に、理系への進学希望者も増え成果も挙がって来ている状況の下で、保護者・生徒の要望をいちはやく実現することになりました。

実現の方法として、今年度まで男子部に設けられておりました「特進コース」がこの要望を吸収・合併するという形を採り「男女共学」の「特進文系コース」・「特進理系コース」に様相を一新致します。

また、女子部には新設コースとして、国際化社会に対応する「国際(明徳)コース」が設置されることになりました。このコースの特色は、在学中に留学を果たすという目標を持つと同時に、本校の姉妹校である明徳短大との５又は７年間の一貫教育を視野に入れたコースとして設置されることになりました。

◎『聖火リレーランナーとして出場』

長野オリンピックの聖火ランナーとして星城高校から、二年生の是竹さん・平松さんの女子生徒２名が参加しました。

聖火リレーの前日(1月20日)には東急ホテルで激励会があり、緊張した面持ちで参加しました。当日は走行区間第６区の今池から御器所までの約８００ｍを10分程かけて、笑顔で元気よく走りました。

◎『国民体育大会』

10月25日から開催された第52回国民体育大会（なみはな国体）秋季大会でわが星城高校はよく健闘、成績等は以下のとおりです。

・柔道（団体）５位
・バスケットボール（女）３位
・レスリング(個人)…(少年グレコローマン)
　２位… 115ｋｇ級　加藤　賢三
　３位…　63ｋｇ級　近藤　善裕
　５位…　54ｋｇ級　上仮屋　充
・銃剣道（団体）５位
・水　泳
　２位…200m平泳ぎ　栗本　直樹
・剣道（男）（団体）

★＜星城中学校＞

◎『語学研修を通しての国際交流』

本校の建学の精神の一つである「世界観の確立」の具現化としてのオーストラリア語学研修を終え、生徒は以前にも増して生き生きしている。多くの生徒は何事も初めてのことばかりで、右も左もわからないままホームステイを体験し、身ぶり手振りを交えた必死の英語でコミュニケーションをとったわけである。そして、ホームステイや姉妹校での授業参加という生徒にとっては多くの困難の中から得られた「思いやりの心」や「人の温かさ」は、日頃の学校生活では容易に得られない大変有意義なものであった。

国際交流が盛んになった現在、我々日本人は日本の慣習・文化を的確に捉え、海外へ伝えることのできる力を要求されると思う。それは、お互い自国の文化をその国民が理解し尊重していなければ、的確に他国に伝えることができないからである。

この語学研修の経験を、二年後の星城高校での韓国修学旅行でうまく発揮することができ、さらなる国際交流の第一歩となることを期待している。

★＜星の城幼稚園＞

◎『桶狭間出陣太鼓』

明るい青空のもと、豊明団地内「唐竹公園」でマラソン大会を開催しました。オープンニングは「桶狭間出陣太鼓」です。さて、今回はこの「桶狭間出陣太鼓」について説明します。

太鼓の指導は昭和59年から保育に取り入れてきました。“幼児期の音楽教育はリズムが大切である”“皆で気持ちを合わせることの大切さを知らせたい”との思いから、教職員が岐阜の太鼓の先生の元に通って技術を習得し、園児に教えたのが始まりです。

今ではすっかり定着し、園児達も「年長組になったら太鼓ができる」ことを楽しみにしています。

始めはバラバラの音がしていますが、何度も繰り返すことによって、だんだんに音が合ってきます。気持ちも音もピッタリ合った時の喜びは言い表すことができません。

「運動会」「マラソン大会」「生活発表会」などの行事を発表の場にしています。先生たちの手作りの衣装を着て、鉢巻きをキリリと締めた姿はなかなかのものです。今回の「マラソン大会」ではあさがお組が、「生活発表会」ではこすもす組が発表しました。当日は、お母さんお父さん方もカメラを持って、我が子の晴れ姿の撮影に忙しい様子でした。

◎『生活発表会』

「生活発表会」は例年通り、「豊明市文化会館」で開催しました。座席数 800名の大ホールです。何度も会場の照明、音響の係りの方と打合わせをしたり、衣装合わせをしたりして、リハーサルに漕ぎ着けます。今年度は、インフルエンザの園児が多く、当日まで出演が危ぶまれた子もいましたが、ほとんどの園児が参加することができました。

３歳児は先生と一緒に、日頃の保育の中で読んでもらった絵本から題材をとったお話を演じます。初めての大きな舞台に立ち尽くす子、お母さんに手を振る子もいましたが、リズムに合わせて体を動かす事を楽しみました。

年中組は大好きな繰り返しのお話です。つもりになって動くことの好きな学年です。ウサギやカマキリなど役になることを楽しんでいます。

年長組はストーリーのあるお話、それぞれの役の外に、大道具などの出し入れの係りもします。クラス皆で力を合わせて舞台を作っていくことも学んできています。各学年のそれぞれの頑張りに、客席からは惜しみない拍手がわきあがって、平成９年度の生活発表会は幕を閉じました

★＜名英予備校＞

○『新年度キャッチフレーズは“講座＋αがある”』

このキャッチフレーズは、入学した生徒や保護者に喜ばれる「よい予備校」であり続けようとする願いをこめたもの。そのため、平成10年度は、現役コースを含め、大幅な機構改革をし、個別指導などのサポート体制を強化する。概要は以下の通り。

＜昼間部大学受験科＞

①水曜日を特別指導日とし、個人指導のほか、特別講座やテストのフォローなどを実施。

②日曜日も自習室を開放。祝日以外は年中無休とし、夜間も現行より90分延長する。

③医療・看護コース新設。

④午前授業を夜間に振替可能なフレックス制導入。

⑤その他、従来のシステムに加え、夜間学習会や事前学習教材の開発、質問箱の設置など。

＜現役生コース＞(通称をジャンプコースと改称)

①土・日を中心に、講座数を増やし、従来の倍近い27講座設置。第2第4土曜のみの講座もある。

②90分授業中に「質問タイム」を設け、個人指導。

③その他、単元別確認テスト・単語テスト等実施。

★＜名英図書出版協会＞

○『小学校英語教育事情から』

1992年文部省の働きかけでスタートした小学校英語教育の研究開発は、当初指定校が大阪の２小学校だったものが、今ではほぼ各県１校の割合に拡大し、その波及効果で独自で英語研究開発を始めた市町村も増えてきています。そして、昨年11月、文部省の諮問機関、教育課程審議会が新しい学習指導要領の骨組みとなる「中間まとめ」を発表しました。その中に、教科を横断する「総合的な学習の時間」というものが盛り込まれました。小学校では３年生から週３時間実施し、国際理解教育の一環として英会話の学習ができるようになるということです。

事業部では早くから小学校英語教育の調査・研究に取り組み、資料収集、授業参観等を続けてまいりました。そして最近ではこれらのデータを踏まえて教材・教具の開発に取り掛かったところです。中学校を主体として図書教材を開発・提供してきた事業部、名英図書出版協会にとって、新しい市場に船を出す期待と不安の平成10年度です。

＝オープンカレッジ事務局だより＝

[平成９年度の実績]

名古屋明徳短期大学のオープンカレッジ（継続して学ぶ有料講座）は９年４月からの前期講座を皮切りに、８月の夏期講座、９月からの後期講座、また１月からの冬期特別講座と年間を通して全51講座を開講しました。受講者数は当初目標の 1,000名を突破し大盛況で終了することができました。

一方、公開講座（単発的に行う無料講座）は年間５講座を開講し、約200名の受講者がありました。中には全講座出席の方も数多くあり、その熱心さには驚かされるほどでした。

受講者居住地ベスト３は、東海市・知多市・名古屋市の順で、特にオープンカレッジを伏見の本部会場でも開講したことで、名古屋市民の参加増が目につきました。年間を通した開講により、地域住民からの理解も着々と根付きつつあり、今後も生涯学習社会への期待に応えて行きたいと思います。

[平成10年度の計画]

開講３年目を迎えるオープンカレッジは、5月からの前期講座、８月の夏期講座、９月からの後期講座と、年間を通して約60講座を開講する予定です。前期講座はすでに３月下旬より申込みを受付けており、今年も順調なスタートを切ることができました。

また今年から新たに「会員制度」を導入することになりました。この制度で生涯学習に意欲的な方々がより学びやすくなる環境を提供してまいります。

また、公開講座は今年度のメインテーマを『アジアへのまなざし、アジアからのまなざし』と題して

前期２講、後期４講の計６講座を開講します。今年は明徳短大のキャンパスカラーに相応しいメインテーマのもと、魅力ある講座をラインナップしました。学園教職員の方々を始め、ご家族・お知り合い・ご父兄の方々からのご参加をお待ちしております。

ここ数年、全国の大学短大ではオープンカレッジや公開講座等の開放事業が盛んに行われています。愛知県内ではこの事業を行っている大学短大が78校ありますが、明徳短大の実施状況（９年度実績）はベスト４の堂々の実績であります。

今後とも地域住民の方々から、名古屋明徳短期大学を学びの場としてご利用いただけますよう、全力で取り組んで行きたいと思います。

＝　教学運営会議報告　＝

「自己点検・自己評価に基づく教学面の充実策」をテーマに掲げた平成９年度名古屋石田学園教学運営会議の第３回(11/26),第４回(3/4) について報告する。第２回のまとめを受けて第３回会議は、４月以降の実践の過程で各部門がどのようなチェックと改善を行ってきたか、その達成度を併せ発表した。

また、次年度の重点目標の検討状況を報告した。開会の挨拶で学園長は、連日の学校紹介に関する教職員の尽力を労うとともに、募集状況の厳しさと塾関係者の入試や教科指導への鋭い指摘を紹介し、生徒減少期を乗り切る魅力ある学校の根源、即ちより良い教育内容の構築に直結する討議を要請した。

短大は前期終了をみた半期制について学生の学修にとって概ね良好な結果とし、アドバイザー制や学長からの便り等で学生のマナーや生活意欲の改善に手がかりを得ていると報告した。また、良い教授法の検討と対策、インターンシップに近い自由研究の実態を報告。推薦入試の結果は前年比減であったが、指定推薦で安定した数を確保したのでこれを主眼に取り組む意向を示した。高校はこの１年を教職員の意識改革への土壌づくりの期間と位置づけ、10年度自己点検・評価のための環境づくりは進んでいる報告。更に公表できるシュラバス作成で生徒の学習計画、保護者の学校理解に役立つ大きな一歩を踏み出すと述べた。中学校も６カ年を見通したシュラバスを作成中で、一貫教育の中身の充実・指導力の向上という点で教員の参画意識が育ってきたと発表。

幼稚園は幼児教室の在り方が課題の一つで本部と提携して取り組むとし、全般に活力ある教育実践が保護者の理解・支持を得ている様子を報告した。

予備校からは昼間部の改善、夜間部の名称変更・時間延長・講座増設など実態を踏まえた改善方向が検討中であると発表された。事業部の発表では小学校英語教材についてモデル校とタイアップした調査研究が注目を集め、2003年の教育課程改定により総合学習の時間が全国市場になると分析し、時勢を先取りした意欲的・独創的実践を営業に直結させている点が高く評価された。閉会の挨拶で、学園長は「計画倒れにならぬように」努力が実を結ぶよう実行されたいと結んだ。

第４回会議の冒頭、学園長は短大の自己点検・評価が学園全体に大きな波紋を呼び、高校ではシュラバスを公表する運びに至ったことが教員研修を充実させ、対外的にも信頼を得るであろうと評価し、この会議の大きな産物であると述べ、次年度へ向けて活発な総括討議を要請した。

短大は平成12年度の文部省審査に合わせてカリキュラムを再度見直すとともに、学生のマナー・ルール遵守への指導強化、教授法改善の討議の続行と授業実践に取組む等、４つの重点課題を発表。高校は教科指導の組織的な点検・評価、職員研修の充実強化、教育相談システムと系統的指導体制、12年度以降の男女共学の在り方を重点目標に挙げた。中学校は一貫教育推進のため、全員一致して教育目標具現に取り組むとして、意識高揚、研修強化、シュラバス作成、生徒による授業評価、全員による生徒募集を重点に掲げた。幼稚園は募集目標総数を見事に達成したが、引き続き「心を育てる教育」を目指し、職員相互の協力を母体に、保護者ニーズの再点検などに取組むと述べた。予備校は重点目標を３点に絞り、「よい予備校」であり続けることを柱に、昼間部指導強化の他、夜間部拡充で軸足を現役中心に移す詳細な具体策を発表した。事業部は全体テーマと各職員が取組むテーマに分け、全体テーマの中に小学校市場の開拓という新しい目標を掲げた。

このような各部門固有の課題を重視し、次年度の教学運営会議は５月と３月の２回とし、教学運営室が部門へ積極的に出向いて協力・支援する体制が了解され平成９年度の会議を終了した。

閉会に当たり学園長から、生徒減少期こそキメ細かなサービスが志願者・保護者・出身学校に深い印象を与える。募集対策の工夫・経験の交換の機会を持ちたいと挨拶があった。　［文責　教学運営室］

=『第４６回東海三県中学校英語弁論大会』=

本学園主催の第46回東海三県中学校英語弁論大会は、11月3日（文化の日）星城高等学校石田記念館において、75校75名の参加のもと開催されました。本年は予選を３会場に分けて午前中開催、20名が残り午後の決勝に臨みました。

いずれも、とても中学生とは思えないほどすばらしく年々スピーチも向上、審査員も順位をつけるのに頭を悩ます状況で盛況のうちに行われました。特に星城中学校の野口さんも５位に入賞、今年新しく出来たオーストラリア領事賞を受賞しました。入賞者は次のとおりです。

優勝　学園長賞・愛知県知事賞
　　木村紀恵未　吉田方中（豊橋市）
二位　学園長賞・名古屋市長賞
　　村上　芽衣　竜南中（岡崎市）
三位　学園長賞・中日賞
　　武部　愛子　寺津中（西尾市）
四位　学園賞・日豪協会賞
　　稲葉　久人　青陵中（豊橋市）
五位　学園賞・オーストラリア領事賞
　　野口　晃子　星城中（豊明市）

愛知県監査委員による監査

（財政的援助団体等監査）

11月４日（火）愛知県の補助金等交付に係る出納その他の事務の執行についての監査が、星城高等学校会議室で行われました。

当日は9時30分からほぼ終日、県の監査委員始め 事務局担当官３名により監査、立会者として私学振興室 2名の同席もありました。

監査は財政に関する規定に沿って４～５年に一度実施されるもので、経常費補助金として人件費等がまた一般事項として入学納付金・授業料軽減・海外研修等について細部に亘り監査を受けました。最後に講評の席で監査委員から「監査の結果、事業の実施状況及び経理事務は適切に行われている」と発表がありました。

会計検査院実地検査

平成７年度・８年度私立大学等経常費補助金に係る会計検査院の実地検査が、1月22日（木）・23日（金）の２日間、名古屋明徳短期大学で行われました。この実地検査は明徳短大が平成元年に開学以来初めて受けるものです。

会計検査院の文部検査第１課副長と調査官の２名で実地検査が行われ、日本私立学校振興・共済事業団の課長補佐１人も同席されました。検査対象として「名古屋明徳短期大学が交付を受けた補助金にかかる基礎データと報告内容の確認並びに事務の取扱いについて」行われた。

短大の専任教員の発令・給与・勤務等、学生定員・現員・入学者等、及び学生納付金等について検査。又、外国人教員の確認・社会人の受入れ・公開講座についても検査が行われた。いずれも事前に書類を整え対応したので特に大きな問題もなく済んだが、なお部分的には改善の余地があることも分かった。

=編　集　後　記=

第18回冬季オリンピック長野大会は２月22日、長野市の五輪スタジアムで閉会式を行い、16日間にわたった冬の祭典の幕を閉じた。冬季五輪では史上最多の72カ国・地域から約2300人の選手が参加。

地元日本は冬季史上最多となる金５、銀１、銅４の計10個のメダルを獲得。大会は大いに盛り上がった。この時期、わが学園を顧みると10年度の募集で苦戦を強いられた部門もありました。

平成10年度は名古屋明徳短期大学の開学10周年にあたる記念すべき年であります。

2001年には名古屋石田学園創立60周年を迎えます。各部門とも教育内容の充実をはかり、学園全体が心をひとつにして長野オリンピック同様大いに盛り上げ、飛躍の年にしたいものです。